第19巻51号［宮崎県第51週（12/18～12/24）全国第50週（12/11～12/17）］　平成29年12月28日

宮 崎 県 感 染 症 週 報

宮崎県健康増進課感染症対策室・宮崎県衛生環境研究所

宮崎県第51週の発生動向

□　全数報告の感染症（51週までに新たに届出のあったもの）

1類感染症：報告なし。2類感染症：結核4例。3類感染症：報告なし。
4類感染症：つつが虫2例。5類感染症：アメーバ赤痢1例、急性脳炎1例、梅毒2例。

	疾患名	報告保健所	年齢群	性別	病型・類型	症状　等
2類	結核	宮崎市	20歳代	女	肺結核	症状なし
			30歳代	男	無症状病原体保有者	―
		延岡	70歳代	男	無症状病原体保有者	―
		日南	70歳代	男	肺結核	自覚症状なし
4類	つつが虫病	延岡	40歳代	男	―	頭痛、発熱、刺し口、リンパ節腫脹、発疹
		小林	40歳代	男	―	頭痛、発熱、発疹
5類	アメーバ赤痢	延岡	20歳代	女	腸管アメーバ症	下痢、粘血便、しぶり腹、腹痛、大腸粘膜異常所見
	急性脳炎	宮崎市	5～9歳	男	インフルエンザウイルスA	発熱、痙攣、意識障害
	梅毒	宮崎市	70歳代	男	無症状病原体保有者	―
		高鍋	20歳代	女	早期顕症梅毒Ⅰ期	初期硬結

□　定点把握の対象となる5類感染症

・定点医療機関からの報告総数は2,216人（定点当たり47.8）で、前週比131%と増加した。なお、前週に比べ増加した主な疾患はインフルエンザと感染性胃腸炎で、減少した主な疾患は咽頭結膜熱と水痘である。

★インフルエンザ・小児科定点からの報告★

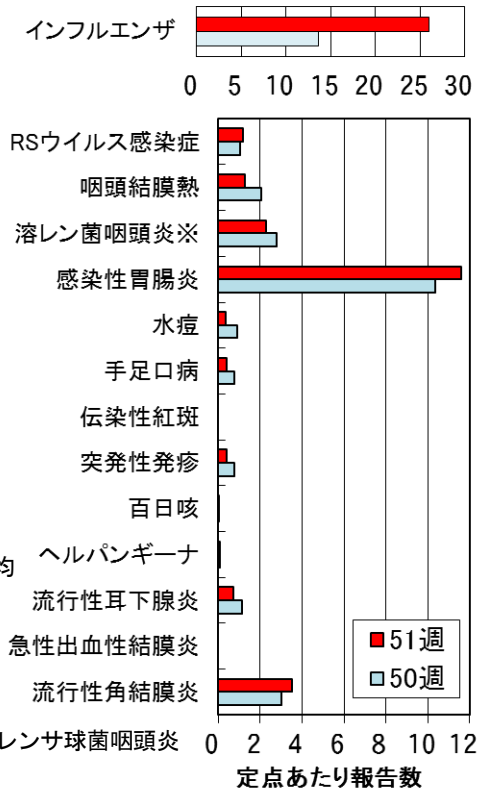
【インフルエンザ】

報告数は1,536人(26.0)で、前週比191%と増加しており、例年同時期の定点当たり平均値*(3.2)の約8倍である。日南(47.6)、高鍋(31.7)、宮崎市(29.5)、日向(29.3)保健所からの報告が多く、年齢別は5～9歳が全体の約4割を占めた。

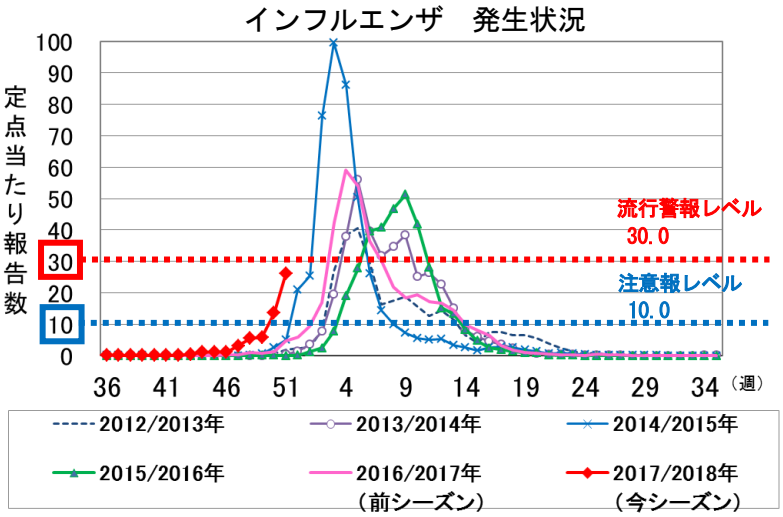
【感染性胃腸炎】

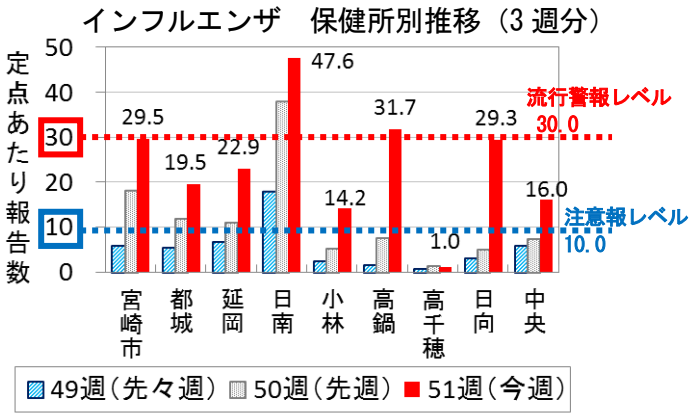
報告数は418人(11.6)で、前週比112%と増加したが、例年同時期の定点当たり平均値*(20.1)の約0.6倍である。中央(27.0)、小林(23.7)、日南(21.0)保健所からの報告が多く、年齢別は1～3歳が全体の約4割を占めた。　＊　過去5年間の当該週、前週、後週（計15週）の平均

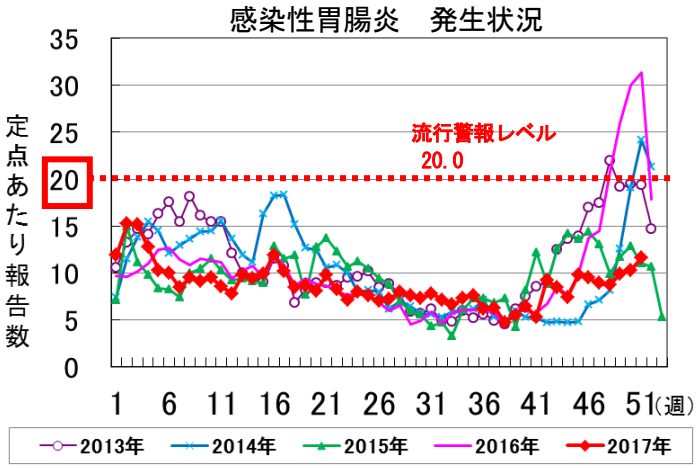
《前週との比較》

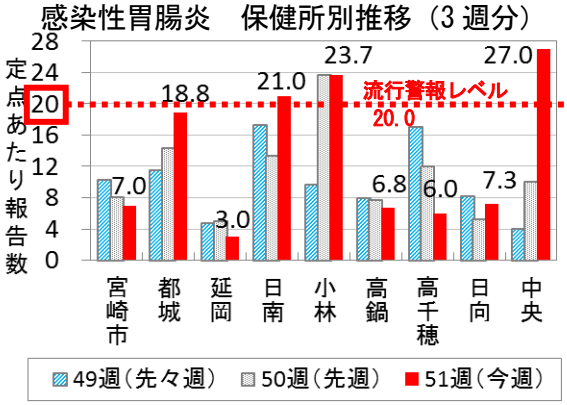


※　A群溶血性レンサ球菌咽頭炎









★基幹定点からの報告★

報告なし。

★保健所別　流行警報・注意報レベル基準値超過疾患

保健所名	流行警報・注意報レベル基準値超過疾患
宮崎市	インフルエンザ(29.5)
都城	インフルエンザ(19.5)
延岡	インフルエンザ(22.9)
日南	インフルエンザ(47.6)、感染性胃腸炎(21.0) 流行性耳下腺炎(8.0)
小林	インフルエンザ(14.2)、咽頭結膜熱(3.0)、 感染性胃腸炎(23.7)
高鍋	インフルエンザ(31.7)
高千穂	なし
日向	インフルエンザ(29.3)
中央	インフルエンザ(16.0)、感染性胃腸炎(27.0)

＊流行警報レベル開始基準値＊

・インフルエンザ(30.0)
・咽頭結膜熱(3.0)
・感染性胃腸炎(20.0)
・流行性耳下腺炎(6.0)

＊流行注意報レベル基準値＊

・インフルエンザ(10.0)

全国 2017 年第 50 週の発生動向

□ 全数報告の感染症（全国第 50 週）

1類感染症	報告なし					
2類感染症	結核	317 例				
3類感染症	腸管出血性大腸菌感染症	22 例				
4類感染症	E 型肝炎	4 例	A 型肝炎	3 例	オウム病	2 例
	コクシジオイデス症	1 例	チクングニア熱	1 例	つつが虫病	41 例
	デング熱	2 例	日本紅斑熱	1 例	マラリア	1 例
	レジオネラ症	14 例				
5類感染症	アメーバ赤痢	18 例	ウイルス性肝炎	4 例	カルバペネム耐性腸内細菌感染症	19 例
	急性脳炎	9 例	クロイツフェルト・ヤコブ病	1 例	劇症型溶血性レンサ球菌感染症	10 例
	後天性免疫不全症候群	12 例	ジアルジア症	2 例	侵襲性インフルエンザ菌感染症	7 例
	侵襲性肺炎球菌感染症	48 例	水痘（入院例）	9 例	梅毒	81 例
	播種性クリプトコックス症	2 例	破傷風	2 例		

□ 定点把握の対象となる 5 類感染症

定点医療機関当たりの患者報告総数は前週比 121%と増加した。なお、前週と比較して増加した主な疾患はインフルエンザと感染性胃腸炎で、減少した主な疾患は手足口病とヘルパンギーナである。

インフルエンザの報告数は 36,664 人(7.4)で前週比 182%と増加し、例年同時期の定点当たり平均値*(3.4)の約 2.2 倍である。長崎県(18.9)、岡山県、宮崎県(13.6)からの報告が多く、年齢別では 5～9 歳が全体の約 4 割を占めた。

感染性胃腸炎の報告数は 27,353 人(8.7)で前週比 111%と増加したが、例年同時期の定点当たり平均値*(14.8)の約 0.6 倍である。大分県(16.3)、愛媛県(14.6)、埼玉県(13.2)からの報告が多く、年齢別では 1～4 歳が全体の約半数を占めた。

＊　過去 5 年間の当該週、前週、後週（計 15 週）の平均値

宮崎県 感染症情報　（72定点医療機関 ）

2017年 第51週（12月18日～12月24日）

疾病名		第50週	第51週	宮崎市	都城	延岡	日南	小林	高鍋	高千穂	日向	中央
インフルエンザ	報告数	803	1536	472	195	160	238	71	190	2	176	32
	定点あたり	13.61	26.03	29.50	19.50	22.86	47.60	14.20	31.67	1.00	29.33	16.00
RSウイルス感染症	報告数	37	42	18	10		1		4		7	2
	定点あたり	1.03	1.17	1.80	1.67	0.00	0.33	0.00	1.00	0.00	1.75	2.00
咽頭結膜熱	報告数	74	45	13	13	3	2	9	3		1	1
	定点あたり	2.06	1.25	1.30	2.17	0.75	0.67	3.00	0.75	0.00	0.25	1.00
A群溶血性レンサ球菌咽頭炎	報告数	100	82	22	13	15	3	10	2	1	11	5
	定点あたり	2.78	2.28	2.20	2.17	3.75	1.00	3.33	0.50	1.00	2.75	5.00
感染性胃腸炎	報告数	372	418	70	113	12	63	71	27	6	29	27
	定点あたり	10.33	11.61	7.00	18.83	3.00	21.00	23.67	6.75	6.00	7.25	27.00
水　痘	報告数	32	13	7	1	2		1			2	
	定点あたり	0.89	0.36	0.70	0.17	0.50	0.00	0.33	0.00	0.00	0.50	0.00
手足口病	報告数	27	15	13		1				1		
	定点あたり	0.75	0.42	1.30	0.00	0.25	0.00	0.00	0.00	1.00	0.00	0.00
伝染性紅斑	報告数											
	定点あたり	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00
突発性発しん	報告数	27	15	7	2	2	2		1		1	
	定点あたり	0.75	0.42	0.70	0.33	0.50	0.67	0.00	0.25	0.00	0.25	0.00
百 日 咳	報告数	1	1								1	
	定点あたり	0.03	0.03	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.25	0.00
ヘルパンギーナ	報告数	3	2	2								
	定点あたり	0.08	0.06	0.20	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00
流行性耳下腺炎	報告数	40	26		2		24					
	定点あたり	1.11	0.72	0.00	0.33	0.00	8.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00
急性出血性結膜炎	報告数											
	定点あたり	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00						
流行性角結膜炎	報告数	18	21	15	4	2						
	定点あたり	3.00	3.50	5.00	2.00	2.00						
細菌性髄膜炎	報告数											
	定点あたり	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00		0.00	
無菌性髄膜炎	報告数											
	定点あたり	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00		0.00	
マイコプラズマ肺炎	報告数											
	定点あたり	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00		0.00	
クラミジア肺炎	報告数											
	定点あたり	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00		0.00	
感染性胃腸炎（ロタウイルス）	報告数											
	定点あたり	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00		0.00	

インフルエンザ定点：59、小児科定点：36（インフルエンザ定点を兼ねる）、眼科定点：6、基幹定点：7

上段：報告数
下段：定点あたり報告数

●全数把握対象疾患累積報告数（2017年第1週～51週）

2類感染症	結　核	192例(4)				
3類感染症	腸管出血性大腸菌感染症	17例				
4類感染症	E型肝炎	3例	重症熱性血小板減少症候群	13例	つつが虫病	31例(2)
	日本紅斑熱	8例	レジオネラ症	9例	レプトスピラ症	2例
5類感染症	アメーバ赤痢	4例(1)	ウイルス性肝炎	5例	カルバペネム耐性腸内細菌感染症	11例
	急性脳炎	5例(1)	クロイツフェルト・ヤコブ病	3例	劇症型溶血性レンサ球菌感染症	4例
	後天性免疫不全症候群	11例	侵襲性インフルエンザ菌感染症	2例	侵襲性肺炎球菌感染症	15例
	水痘（入院例）	2例	梅　毒	19例(2)	播種性クリプトコックス症	1例
	破傷風	5例	麻しん	1例		

（　）内は今週届出分、再掲

平成29年度　インフルエンザ抗体保有状況調査　―宮崎県―　　＜資料＞

感染症流行予測調査事業の一環として、2017/2018年のインフルエンザ流行シーズン前における県内の抗体保有状況調査を宮崎県健康づくり協会および県立宮崎病院の協力を得て実施した。

調査では、9年齢群・278名（0～4歳：60名、5～9歳：17名、10～14歳：25名、15～19歳：26名、20～29歳：49名、30～39歳：25名、40～49歳：26名、50～59歳：24名、60歳以上：26名）から同意を得て、2017年7月3日から8月18日に収集した血清を対象とした。また、下記の4抗原（今シーズンのワクチン株）を用い、赤血球凝集抑制抗体（HI抗体）価の測定を行なった。

1　Aパンデミック型：A/シンガポール/GP1908/2015（H1N1）pdm09
2　A香港型：A/香港/4801/2014（H3N2）
3　B型：B/プーケット/3073/2013（山形系統）
4　B型：B/テキサス/2/2013（ビクトリア系統）

［ 調査結果 ］

感染防御に有効と考えられる40倍（1:40）以上の抗体保有状況は以下のとおりであった。

また、80倍（1:80）以上及び160倍（1:160）以上の抗体保有状況も併せて図に示した。

1　Aパンデミック型：A/シンガポール/GP1908/2015（H1N1）pdm09に対する抗体保有状況

10～14歳群及び20～29歳群では60%以上と高い保有率（76.0%、67.3%）であった。5～9歳群、15歳～19歳群及び30～39歳群では比較的高い保有率（40.0～53.8%）であった。60歳以上では中程度の保有率（26.9%）を示し、0～4歳群及び40～59歳の各年齢群では比較的低い保有率（11.5～20.8%）であった。

2　A香港型：A/香港/4801/2014（H3N2）に対する抗体保有状況

5～39歳の各年齢群及び60歳以上の年齢群では60%以上と高い保有率（63.3～92.3%）であった。40～59歳の各年齢群では比較的高い保有率（42.3～54.2%）を示し、0～4歳群では中程度の保有率（36.7%）であった。

3　B型：B/プーケット/3073/2013（山形系統）に対する抗体保有状況

10～39歳の各年齢群で高い保有率（64.0～76.0%）を示し、50～59歳群で比較的高い保有率（50.0%）であった。5～9歳群、40～49歳群及び60歳以上の年齢群では中程度の保有率（26.9～34.6%）を示し、0～4歳群では低い保有率（10.0%）であった。

4　B型：B/テキサス/2/2013（ビクトリア系統）に対する抗体保有状況

全ての年齢群で40%以下であり、15～19歳群及び40～49歳群で中程度の保有率（38.5%、26.9%）であった。5～14歳の各年齢群、20～39歳の各年齢群及び50歳以上の各年齢群では比較的低い保有率（11.8～24.0%）を示し、0～4歳群の抗体保有率は1.7%と最も低い保有率であった。

［ コメント ］

2016/17シーズンは、全国的にAH1pdm09亜型、AH3亜型及びB型の混合流行で、流行の主流は2014/15シーズン以来2シーズンぶりにAH3亜型であった。また、宮崎県では分離・検出されたインフルエンザウイルスの約7割がAH3亜型であり、次いでB型（山形系統）、B型（ビクトリア系統）、AH1pdm09亜型の順であった。

AH1pdm09亜型の40倍以上の抗体保有率は前年度と比べ、どの年齢群でも低くなっている。これは2015/2016シーズンは流行の主流がAH1pdm09亜型であったのに対し、昨シーズンはAH1pdm09亜型の流行が小規模であったことを反映していると推測される。AH3亜型の40倍以上の抗体保有率は、前年度に比べ全体的に高い傾向であった。年齢群別の抗体保有率は5～39歳と60歳以上の幅広い年齢層で高く、昨シーズンのAH3亜型の流行を反映していると推測される。B型の40倍以上の抗体保有率は、山形系統では前年度に比べ高い傾向であり、特に10～39歳で60%以上と高くなっている。ビクトリア系統では前年度と比べ大きな変化はみられなかったが、全ての年齢群において抗体保有率が40%以下であった。

病原微生物検出情報によると、今シーズンは全国的に例年よりも早くインフルエンザの流行シーズンに入っており、現在のところAH1pdm09亜型が優位となっている。本県もすでに流行シーズンに入っており、報告数が増加しているため、ワクチン接種や手洗いなどの予防対策をとることが重要である。

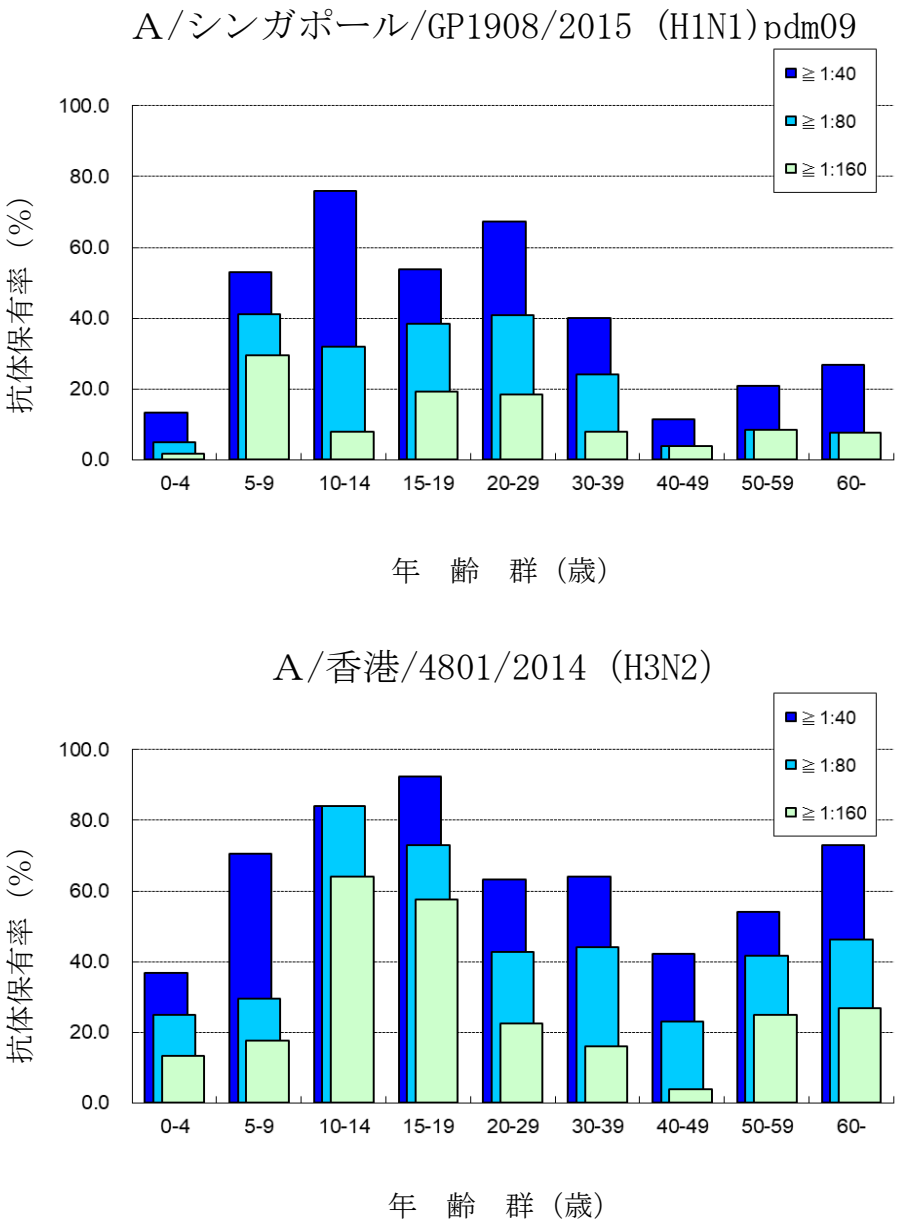


図　宮崎県における年齢別HI抗体保有状況（2017/2018シーズン前）